



1945年8月9日長崎の原爆投下で背中に大きな怪我を負った谷口稜暉（スミテル）さん。彼は当時郵便配達の仕事をしていました。

2014年、私は初めて谷口スミテルさんにお会いしました。その日は流れるような雨が降っていて、印象的な日として覚えています。谷口さんは私にある本を紹介してくれました。ご自身の被爆経験がモデルとして描かれたピーター・タウンゼンドの著作本“The Postman of Nagasaki”です。それから何度か面会をして、私は谷口さんから、当時のピーターの取材の時の様子を伺いました。ピーターの事を話す谷口さんはいつも笑顔でした。ピーターのサインは今でも部屋に貼ってあると聞きました。しかしその本は日本では絶版になっていたのです。そこで、東京でこの本の再出版ができる出版社を探し歩く事になりました。

2015年、私は友人と共にニューヨークへ行き、谷口さんのスピーチを聞きました。それは見事なスピーチでした。谷口さんが伝えたい事を知り、それはピーターの本の内容に近いと感じました。改めて2人が友人関係を築けた理由がわかりました。しかし私は谷口さんに自分はフィルムメーカーだと言えずにいました。戦争、赤い背中の谷口さん、到底自分では向き合いきれない大きなテーマだと怯えていたのです。

2016年、フランスでピーターの娘であるイザベル・タウンゼンドを訪ねました。初めて会った彼女の印象は明るく知的で誠実な女性でした。彼女となら映画ができるかもしれない、と直感がよぎりました。出会ったその日にピーターの書斎で彼女のショートインタビューを撮りました。彼女は本のモデルの少年が生存していることを知りませんでした。

2017年夏、谷口さんはイザベルの訪問を待たずに旅立たれました。そして、谷口さんに自分はフィルムメーカーだと言えないままのお別れでもありました。

その後、イザベルと私は諦める事なく、この映画作りを計画し実行しました。資金問題、COVID-19、約5年に渡る私たちの制作期間には、いろんな事情が含まれています。時間はかかったものの多くの人たちに賛同を頂き、遂に映画は完成させる事ができました。この挑戦はきっと忘れる事がないと思います。私はこのような奇跡的な映画制作に参加する事ができた事を誇りに思います。

先代たちが体験した事や残した言葉、私たちには伝承していく仕事があります。

2021年も8月がきます。人々が苦しむような心配ごとがなく、ゆっくりと芸術文化・映画を感じるこのことのできる豊かな社会の時間が流れるよう願っています。

映画作家 川瀬美香



ピーター・タウンゼンドを知っていますか？
彼は英国の元空軍大佐。戦争が終わった後、彼は作家になりました。

ピーター・タウンゼンドの執筆部屋

2016年、ピーター・タウンゼンドの書斎の壁には、彼が世界旅行で乗った車のハンドルや、飛行機のミニチュア模型、彼の写真などが飾られています。この部屋は、彼が亡くなってから何も変わっていません。机の脇には、『長崎の郵便配達』の執筆に使った資料や文章が山積みになっています。

映画の始まり

イザベル・タウンゼンドはピーターの実娘であり女優である。2016年、ある日フランスに暮らしているイザベルへ日本の映画作家の川瀬美香が訪ねてきました。その理由は彼女の父親の著書「長崎の郵便配達」について。そこでイザベルは、その本のモデルとなった被曝した少年がまだ生きていることを知ります。そして二人は長崎の郵便配達の少年に会いに行く事にしました。その少年の名前は谷口稜暉さん。
イザベルはこれまでに触っていなかった父の書斎の取材書類を読み返しました。そして父が長崎で録音した取材のカセットテープを発見。亡くなってから23年ぶりに父の声を耳にしました。しかし、2017年、谷口稜暉さんは亡くなってしまいました。二人の面会は叶いませんでした。
それでも、2018年、イザベルは長崎へ向かいます。前年に亡くなった人を舟で黄泉に送るという長崎の夏の伝統文化、谷口稜暉さんの舟（精霊舟）が出るからです。そして、何より、父が何故この本を書いたのか、を知るためでした。

長崎への旅

長崎市稲佐山の頂上、父も同じ景色を眺めたに違いない展望台にいるイザベル。彼女は地上から300メートルの高さから長崎の街を見下ろしています。長崎港は山に囲まれていて、その山の上の方まで人々が暮らす家が広がっています。光っている青い海の間には小さな島々が浮かんでいるようです。イザベルの父が書いた本の足跡をたどる旅が始まります。
イザベルは稲佐山の中腹にある谷口家を訪れます。家の前には谷口さんの「精霊舟」の準備が進んでいました。谷口さんの

娘・澄江さんに案内され、彼の仏前で慣れない手付きで手を合わせお参りします。イザベルは澄江さんに、当時のピーターの言葉とサインが書かれた色紙を見せてもらい、父がここに来ていたことを実感します。

それから、父の当時の通訳者である田崎昇氏に会い、父の取材時の事を聞きます。そして戦争時に原爆被害を大きく受けた浦上天主堂にて、高見大司教から当時の人々の事を聞きます。

彼女は原爆が投下された中心地に立ちつくします。そして彼女と娘たちは原爆資料館を訪れ、アメリカ軍が撮影した古いフィルムを観ます。そこには大きな火傷を負った赤い背中のスミテルが写っていました。

イザベルは父の録音テープを聞きながら、爆心地付近を歩きます。ピーターの取材録音テープの音がいろんな場所へ彼女を誘います。

8月9日 長崎県平和記念日

イザベルは父親が残した仕事への理解を深めていきます。実際に父は戦争で空軍として戦っていた経験を持っていました。しかし、彼は68歳の時に、ひとりで長崎に行って原爆被害の少年を取材をしたのです。そしてこの本を書き上げました。「作家の義務は証言することだ。私にはその義務がある」テープに残されていたピーターの音声でした。

長崎最終日

イザベルと家族は長崎の伝統的な文化である仏船「精霊舟」にて谷口さんを送り出しました。あちこちから爆竹の大きな音が聞こえてきます。イザベルは何かを感じ理解したのでしょうか。そして、イザベルはフランスに戻ります。

フランスに戻って

イザベルは父が仕事を通じて残した心を理解し、自分は何ができるかを考えてました。それは、この思いを子どもたちへ向けて引き継ぐことだと思いました。女優の彼女にとって、その手段のひとつとして演劇がありました。彼女は劇を演出します。

劇中の子供たちのセリフ「死んでたまるか、まっぴらごめんだ！」

長崎の郵便配達

The Postman from Nagasaki

出演 イザベル・タウンゼンド ピーター・タウンゼンド (ライブラリー映像) 谷口稜暉 (2015年撮影映像) 長崎の皆さん フランスの子供たち

制作 監督・撮影 川瀬美香 編集構成 大重裕二 音楽 Akeboshi/明星

エグゼクティブプロデューサー 柄澤哲夫 プロデューサー イザベル・タウンゼンド 高田明男 坂本光三

製作 長崎の郵便配達パートナーズ 企画制作・配給 ART TRUE FILM 時間 97分 完成 2021年7月